書き抜き読書ノート 406	2009 年 11 月 8 日

水木しげる著「なまけものになりたい」河出文庫、河出書房新社 2003 年 6 月 10 日刊を読む

私の一冊『ゲーテとの対話』

１．僕は 18、9 の時、偶然岩波文庫の『ゲェテとの対話』(エッケルマン著・亀尾英四郎訳)という本を手にした。今は『ゲーテとの対話』(エッカーマン著、山下肇訳)という新訳が出ている。

２．その頃は、太平洋戦争が始まり、いずれ死ぬるのも時間の問題だと思っていたから、当時の若い人は生きることに真剣だった。“ 人生とは何か ” といったことも分らずじまいに死ぬと思うと、全くつまらない。そこで岩波文庫となったわけだが、どうしたわけかその頃、岩波文庫を読む若者は多かった。

３．『ゲェテとの対話』だが、なにしろゲェテの晩年のごく普通の会話を、エッケルマンというマジメな男が書き残したもので、誠実そのものだ。その誠実さが伝わってくるのだろう、友人だか、ゲェテと話しているみたいでとても面白かった。

４．当時はエライ人とか偉人というと、なにかカミサマの次くらいに考えて、人間でないみたいに思う人もいたのだが、それでは “ 人間 ” が分らなくなるので、“ 普通の人 ” の話をきくような気持で読んだ。あまり尊敬などしてなかった。

５．それが良かったのか悪かったのか知らないが、ゲェテは面白い男だと思うと同時に、“ センセイ ” にしてもよろしいナと思って、僕は対話の “ 感心 ” するようなところをノートに書いて戦地までもっていった。

６．そのせいかもしれないが、今でも “ その時その時 ” に必要な言葉が出てくる。
すなわち、人生の “ センセイ ” だったわけです。
そのお陰かもしれないが、どうにか人生を大過なくすごし、ささやかな幸福にもありつけたような気がする。

P145 ～ 146

［コメント］
　あの人気マンガ家水木しげる先生も、「ゲーテとの対話」で「書き抜き読書ノート」の人生における効用を強調されておられる。是非、御一読を。

― 2009 年 11 月 8 日林明夫記―